公的経験を支える家族ネットワーク

―西インド高齢女性のライフストーリーから―

国立民族学博物館　松　尾　瑞　穂

1.　はじめに

本稿は、インド西部マハーラーシュトラ州の都市部に居住する60代以上のチットパーヴァン・バラモンの高齢女性のライフストーリーをもとに、独立期のインドにおいて女性が経験する公的領域（public sphere）と、それを支える家族、親族、近隣などの親密圏のネットワークのありかたについて論じるものである。主な舞台となるマハーラーシュトラ州は、人口約１億人とインドのなかでも大きな州であり、州都のムンバイはインド最大の経済都市である（地図１）。主要言語はマラーティー語で、調査はマラーティー語と英語を用いてライフストーリーを聞き取った[1]。

インドにおける公的領域とジェンダーに関しては、これまでインド女性は圧倒的に私的領域との結びつきから捉えられてきたため、その公的領域との関りや両者の接合については、限られた言及にとどまってきた（Bagchi 2014）。インドの公的領域と私的領域の成立をめぐっては、イギリス植民地支配が大きな影響を与えている。政治学者のパルタ・チャタジーは、政治的にも軍事的にも物質的にも西洋近代による圧倒的な優位性がもたらされ、公的領域の支配権を喪失したインド人男性にとって、唯一自律性を保つことができたのが私的領域であり、私的領域はインドの伝統性や精神的な崇高性を表す場だと見なされていった、と論じる（Chateerjee 1993）。そこではインド女性が伝統や精神性を体現する存在として公的領域からは切り離され、私的領域に閉じ込められることになった。また、物質的には優越性を喪失したが、私的領域の精神性の高さを主張し、植民地政府の干渉は受けないという立場を取ったのである。そして、ポストコロニアルの時代においても、そうした植民地期に形成された、ジェンダー化された近代と伝統の二元論的枠組みは継続されてきた（常田 2011）。

こうした近代と伝統によって特徴付けられるインドの公的領域と私的領域であるが、インド女性はかならずしも一枚岩的な存在ではない。スブラタ・バグチは、インドにおける女性の生活世界と公的領域への参画について研究するにあたり、インド女性という集団の多様性、ひいてはインドの公的領域の複数性とその位階制（ヒエラルキー）について指摘している。すなわち、「インドの公的領域は主として非構造的で、女性の公的領域の形成は一つや二つの厳密な領域の内部にとどまるものではなく、異なる階層の女性は、「私的」と呼ばれるものとは違う、彼女たち自身の活動領域を作る傾向があり、それがインドの場合は真に異種混淆的」（Bagchi 2014：29）なのだという。

---

[1] 本調査は、2013年～2016年にかけて実施された科学研究費補助金基盤（B）「生活世界の変容とジェンダー：インド高齢女性のライフヒストリーを通して」（押川文子代表）の一環として実施された。

地図１　調査対象者の居住地

インドにおける女性の公的領域の複数性と位階性は、これまで女性の公的領域への進出は、高カースト・エリート階層の女性に限られていたのが、それが変化しつつあるということを示している。げんに、労働者階級や農村の女性たちによる、社会的、政治的分野における公的領域への進出は、確実に進んでいる。例えば、SEWA（自営女性労働者協会）をはじめとする女性労働と社会運動の高まりや、政治的なクオーター制といえる、国会から村議会に至るまでの各政治システムにおける女性の留保議席の導入などは、その一例である。当初は家父長制社会において、家族内の男性成員の「代理」に過ぎず、実質的な女性の地位向上には結びつかないと危惧された女性の留保議席制度は、確かにそのようなケースは否定できないものの、女性に対する一定のエンパワーメントをもたらしてきた（喜多村・菅野 2015）。

このようにジェンダーと公的領域の多様な関りがありえるインドにおける女性の経験をとらえるには、ある特定の集団からアプローチすることが妥当であろう。公的領域にアクセスができた女性は高カーストのエリート層が中心だといっても、植民地期に女性運動に身を投じた歴史に残る象徴的な女性たちではなく、市井の女性たちの日常世界と公的世界の接合については、ほとんど語られてこなかった。そこで本稿では、ポストコロニアル期に青年期を迎え、現在は高齢者である女性たちが、若い時に経験した、教育や就労といった日常的な公的領域がいかなるものであったのかを明らかにする。

2. チットパーヴァン・バラモン

まず、調査対象となるチットパーヴァン・バラモンという社会集団について、簡単に記述しておきたい。

今日のセンサスにはカーストに関する項目がないため、各カーストの人数を正確に把握することは難しいが、バラモン人口はマハーラーシュトラ州では2〜3%とされており、人数としては圧倒的な少数派である。チットパーヴァンの人口は、1901年センサスでは11万3605人である。1960年代後半に刊行されたのPattersonの論文では、約30万人前後だとされている（Patterson 1968）。当該集団の出生率の低さからすると、それから人口が倍増するとは思えず、今日でもおよそPattersonが予想した数程度ではないかと考えられる。

チットパーヴァンは別名コーカナスタと呼ばれるが、これはこの集団が、もともとコーカンという、アラビア海に面したゴアへと続く海岸地帯一体を父祖の地とすることに由来する。彼らチットパーヴァン（コーカナスタ）は、コーカン地方から、州内外へと移住し広がった集団である。もともとはコーカンという田舎のバラモンに過ぎなかったチットパーヴァンを取り巻く状況が大きく変わったのが、同集団出身のバーラージー・ヴィシュワナート・バートが、1713年にマラーター王国の宰相（ペーシュワー）に就任してからである。マラーター王国の宰相は内紛により分裂した王家に代わり、王国の実権を握り、その本拠地となしてプネーに宮殿を構えた。バーラージー・ヴィシュワナート・バート以後、その子孫が宰相職を世襲することとなり、同一族が実質的な支配者として君臨した。宰相による支配は、イギリスとの三度にわたる戦いで、マラーター同盟が完全に敗北する1818年まで続いた。

さて、宰相となったバートは、自らの出身集団の子弟に教育を与え、王権内の主要な行政官として積極的に任命した。実は、1713年以前には、歴史書にもチットパーヴァンという語はどこにも登場せず、彼らについての詳しい歴史は分かっていない（Patterson 1968）。歴史の表舞台に登場するのが、宰相政権以降の18世紀となる。それ以後、チットパーヴァンは、行政官、専門職として集団の地位を上昇させ、有力なバラモン集団になっていった。チットパーヴァンが歴史に登場し、地位が上昇し始めた初期のころは、もともと在地バラモンの多数派を占めてきたデーシャスタ・バラモンは、チットパーヴァンとは共食をしない（すなわち、デーシャスタより地位が低いとみなされていた）とされていたが、そうした慣行も18世紀半ばにはなくなり、以後、両者は同等の集団として、共食などの社会関係を築くようになっていく[2]。

今日、マハーラーシュトラ州のバラモン・カーストに属するサブカーストには、デーシャスタ、チットパーヴァン、サラスワット、チャンドラセニヤ・カーヤスタ・プラブー（CKP）の4集団が存在するが、そのうちデーシャスタとチットパーヴァンは数的にも、社会的にも優勢な手段として並び立つ存在である。特に、チットパーヴァンを全インド的に著名にしたのが、マラーター王国崩壊後の

[2] 今日では、通婚に関しても忌避はなくなり両者の婚姻は珍しいことではなくなっている。ただ、チットパーヴァンに関しては、チットパーヴァンの結婚相手を求める傾向が強いとされている。チットパーヴァン同士の婚姻については、各地にあるチットパーヴァン・サンガというカースト団体が、大きな役割を果たしている。

イギリス植民地支配下で、いち早く英語教育を受け、官僚や行政官、判事、医師、教授などの専門知識職に就き、その結果、19世紀から20世紀にかけて多数の政治家や教育者、社会改革者などを生み出したことである。一例を挙げると、民族運動家のバール・ガンガーダル・ティラク、判事で穏健派独立運動家の M.D. ラナレ、教育者で寡婦の再婚などに取り組んだ D.K. カルヴェー、ヒンドゥー民族主義者でヒンドゥー・マハーサバーの創始者の V.D. サワルカルなどがいる。もちろん、どのような集団であれ一元的に捉えることはできないが、こうした一例からでさえ、保守的なヒンドゥー至上主義者もいれば、伝統や因習を打破するきわめて先駆的な人物もおり、チットパーヴァンはその両端のブレをあわせもった集団であるといえる。

3. 調査対象者について

本稿ではマハーラーシュトラ州のプネー、ムンバイ、サングリという都市部に居住する、調査当時60代以上の高齢女性を対象としている。特に用いるのは、2010年～2014年にかけて収集した、10名のチットパーヴァン・バラモン女性へのライフヒストリーに関する聞き取りデータである。彼女たちの年齢は60～80歳（中央値は67.5歳）で、居住地はプネー（7 名）を中心として、ムンバイ（1 名）、サングリ（2 名）である。教育を受けた場所は、およそプネー（5 名）、ムンバイ（2 名）、ナーグプル（1 名）、マハーラーシュトラ州と州境を接するカルナータカ州（2 名）である。

彼女たちの教育レベルは、同世代と比較しても格段に高いのが特徴である。最も年長の80歳女性で 7 年生修了（日本でいう中学 1 年生）という事例を除いて、全員が大学卒業レベル（うち 1 名は最終年度で中退）、かつ大学院修了者も 2 名いる。2011年の国勢調査（センサス）によると、60代以上の女性で大学教育を受けた人は、マハーラーシュトラ州全土でもわずかに13699人、プネー県でみても1572人となっていることからも、いかに調査対象者が高学歴であるかが分かるだろう（表 1）。なお、見合い結婚を中心とするインドの夫婦においては、高学歴な妻の配偶者である夫も彼女たち同様に、あるいはそれ以上に高学歴であることが多く、夫の学歴は大卒が 5 名、大学院修了が 5 名であった[3]。

さらに特筆すべきは、教育に関しては同世代の女性と比べて抜きんでて高いといえる彼女たちでさえ、必ずしも家族のなかで教育を受けた第一世代ではない、ということである。実は、彼女たちの母親の多くも教育を受けており、なかには母親も大卒だという人もいる。母親世代は、存命であれば80～90歳代にあたる1920年～30年生まれで、教育を受けた青年期は、イギリス植民地期の1940年代前後ということなる。その時代は、20世紀初頭からインド都市部で繰り広げられた、英語教育を受けたインド人エリート層による社会改革運動（social reform movement）が女性への教育を盛んに推進した時代を経て、女子教育の重要性が都市中間層の間でも認識されてきた時代にあたる[4]。

---

[3] インドでは、カースト（サブカースト）を同じくする者同士の結婚、すなわちカースト内婚が基本であり、1 名を除く 9 名がお見合い結婚である。お見合い結婚の場合、カーストのほかに、ゴートラ（クラン）、家の格、年齢、学歴、職業、星占いの相性など複数の項目がつりあうことが求められている。そのため、現在でもあまりに高学歴な女性（例えば、アメリカの大学で医学博士号を取得した、など）は、ふさわしい結婚相手どころか、見合い相手を見つけることも難しい場合がある。

調査対象者の母親世代は、そうした、主にプネーのバラモンを中心として繰り広げられた新しい運動の恩恵を受けた第一世代だとみなすことができるだろう。したがって、その子世代にあたる調査対象者たちは、両親ともに教育を受けた都市知識人階層のバラモンの娘として、当たり前のように教育を受ける機会を得てきたといえる。それは、彼女たちの多くが「周りの友達もみな大学に行っていた」や、「母親も大学教育を受けたのだから、当然教育は受けるものだと思っていた」と語ることからも明らかである。だが、それは、ほかの階層、カーストの同世代女性と比較すると、きわめて特別なことであった。

表１　教育を受けた60代以上女性の数

	60代以上女性	学校教育（中等まで）	大学教育	大学教育を受けた比率
マハーラーシュトラ州	5,853,226人	169,065人	13,699人	0.234％
プネー県	438,358人	13,220人	1,572人	0.358％

出典：Census of 2011（GOI2011）

インドにおいて女性が公的領域を経験する機会は、年代、階層、地理的居住地などによっても異なっているが、一般的にきわめて限定的である。北インドを中心として、ジェンダー規範が強い地域では、伝統的にパルダーと呼ばれる女性隔離の習慣があり、女性が外出したり、家族以外の男性と接触したりすることは禁止されている。北インドに比べるとそうした行動規制が緩やかなマハーラーシュトラ州ではあるが、筆者が調査をしていたムルシ郡（taluka）の農村地域では、上位カーストの女性が農地で働いたり、外出したりするということはまれであった。低階層や低カーストの女性は、例えば路上で行商をしたり、家事手伝いとして家々で働いたりと、生活のために公的領域と日常的に関わらざるをえないが、それでも特に結婚適齢期にある若い女性や嫁は、家族からなる私的空間にとどまることが求められる。

ましてや、60代以上の高齢女性が若いころは、幼児婚の習慣も依然として根強く、初潮前に結婚して、妻として、嫁としての役割を果たすことが求められており、いま以上に厳しいタブーがあっただろうことは想像に難くない。そのようななか、大学に通い教育を受ける機会を得ていた調査対象者たちは、例外的に青年期に「学生時代」という自由な時間を享受することができた。彼女たちにとって、学校教育という公的領域や公的システムは、どのように経験されたのだろうか。

4.　学校教育を通した公的領域の経験

ここでは、2 人の語りを紹介したい。

まずは、カルナータカ州ベンガルルに住む A さん（66歳）である。A さんは、カルナータカ州のベルガウムという町で生まれ育った。父親は、早くに鉄道局に勤務していた父親を亡くし、母の実家

[4] 例えば、今日でも代表的な女子大である Shreemati Nathibai Damodar Thackersey（SNDT）女子大学は、社会改革者の D.K. カルヴェーによって1916年に設立された。同様に、プネーでも名門の Ferguson カレッジは1885年、調査対象者のうち 3 人が通った S.P. カレッジは1916年に設立されている。

があるマハーラーシュトラ州東部ナーグプルで育った。教育のためプネー、その後ベルガウムにやってきて、大学で法学を修めたのち、代理店ビジネスをしていた。また、その傍らライター、英植民地支配と闘うフリーダムファイター、社会活動家としても活動し、ベルガウムでも著名な存在であった。一方、母親はプネーで生まれ育ち、結婚してベルガウムにやってきた。母方の祖父はプネーのモダン・カレッジの学長をしており、1923年生まれだという母親もプネーで大学卒業まで教育を受け、B.A.（人文学）とB.Ed（教育学）のダブル学位を取得している。Aさん自身は、ベルガウムで大学卒業（B.A.（経済学））までの教育を受けた[5]。

私がカレッジを卒業したのは、1971年です。私はカレッジまでのすべての教育をベルガウムで受けました。学校はマラーティー語ミディアムで、カレッジは英語ミディアムです。英語は5年生から始まりました。8年生（14歳）までは男女共学でした。

カレッジは家から2キロほど離れたところにあったので、歩いて通っていました。昼前に家で昼食を食べてからカレッジに行っていたので、弁当を持って行ったことはありませんでしたね。昼から学校へ行き、夕方まで授業を受けていました。授業が終わると、友達とアイスクリームを食べたり、ミサールを食べたりしていました。あの頃は、学習塾などはなかったので、自宅や友達の家で勉強していました。仲良しの4人組があり、一緒に勉強したり、おしゃべりしたり、それから映画を見に行くのが楽しみでした。映画は65パイサで、女性用は席が分かれていました。ヒンディー映画です。当時のヒーローはサンジーヴ・クマール、ディリップ・クマール…。

服装は、14歳からサリーを着ていました。カレッジにもサリーです。サルワール・カミーズは着ていきません。祖母が一緒でしたから、祖母に言われてサリーを着るようになりました。そのころベルガウムの冬はとても寒かったので、父が長いコートを仕立ててくれてそれをサリーに上から着ていました。また雨期にはレインコートとレインシューズも履いていましたね。父親が代理店ビジネスをしていたので、ムンバイから新しいものを取り寄せてくれて、我が家は新しいものがたくさんありました（2014年8月19日）。

Aさんの語りは、自宅通いの女子学生の生活をよく表している。ほかの人の語りでも、Aさんのように、カレッジに通う友人との友達づきあいは、勉強、おしゃべり、そしてイベントとしての映画が挙げられており、年頃の娘として親の管理下にありながら、娯楽も楽しんでいた様子をうかがうことができる。Aさんは3人兄弟の長女であり、下に弟と妹がいた。だが、祖母が同居しており、母と二人で家事を担っていたことから、Aさん自身は台所の手伝いをするくらいで、特に家事の労働

[5] ベルガウムはカレッジやメディカルカレッジなども多く、文教都市として知られている。マハーラーシュトラ州とカルナータカ州の一部は、植民地期はボンベイ管区、1950年以降はボンベイ州を構成してきたが、1960年にマハーラーシュトラ州へと変更される際に、カンナダ語話者の多いベルガウムなどの地域はカルナータカ州へ帰属することとなった。Aさんの家族が暮らしていた時代は、ベルガウムはボンベイ州に属しており、Aさんの父はマラーティー語話者として、ベルガウムのマハーラーシュトラ州帰属を求める政治活動も熱心に行っていた。こうした歴史的経緯から、現在でもカルナータカ州北部には、マラーティー語話者も多く居住している。

力として期待されていたわけではなく、その分、自由な時間を持つことができていた。A さんは大学卒業後の23歳で結婚し、以後は就職をすることはなく、公務員の夫の転勤について各地を移動したが、91年に子どもの教育のためベンガルールに引っ越した。

次に紹介するのは、プネーで生まれ育ち、現在までプネーに住み続けている B さん（70歳）である。B さんはプネー旧市街のサダシブ・ペートという典型的な「プネーカル（プネー人）」の居住区にあるワダ（集合住宅）で生まれ育った。ワダには父方オジ家族など総勢25人が一緒に暮らしていたという。父親は弁護士で国民会議派のフリーダムファイターだった。父方祖父は警察官だった[6]。B さんの青春時代は、幼少のころから続けてきたガール・スカウトの活動にささげられていたといっても過言ではない。10歳のころには、プネー支部の代表団の一員としてデリーの全国大会に参加し、首相官邸を表敬訪問し、当時の首相であったインド初代首相ジャワハルラール・ネルーとも会ったことがあるという。調査時にはその時の写真も見せてくれた。

私の大学は、S.P. カレッジです。家から学校までは、自転車で通っていました。大学時代は、ボランティアとしてガール・スカウトの運営スタッフをずっとしていました。ガール・スカウトでは、毎日夕方、スカウトの子どもたちにスポーツを教えたり、ゲームをしたり、休みにはキャンプに連れて行ったり、という活動を行っていました。小さい子どもにスカウトを教えるのが好きで、もう30年以上、町内のグランドでスカウト活動を続けています。それから私は水泳、バトミントン、バレーボールが得意で、そうしたスポーツもしていましたね。ジムカーナーのタンク（スイミングプール）に行って、よく泳いでいました。

（筆者：「水泳は、水着を着ていたのですか？」、B さん：「そうよ、他に何を着るというの？」）

大学時代で一番思い出に残っているのは、1961年のカラクワスラのダムが決壊した災害です。その日はアメリカからのゲストが大学にきて、イベントがありました。次の日にダムが決壊したのです。被害にあった人たちが大勢大学のグランドに逃げてきて、避難生活を送っていました。私たちボランティアは、連日避難キャンプのために働いていました。私の自宅も被害は大きくはありませんでしたが、水がきていろいろと大変でした。でも私はボランティアで家に帰ることもできず、大学に泊ることもありましたよ。でも父は怒りもせず、「ちゃんと仕事をしなさい」といって送り出してくれました（2014年 8 月13日）。

B さんのいうダム決壊は、1961年 7 月12日に起こったプネー史上最大の水害のことである。上流で建設完成間近だったパンシェットダムがひび割れを起こし、大量の水がカラクワスラダムに流れ込み、カラクワスラが決壊、市内を流れるムタ・ムラ川の大氾濫を引き起こした。プネー旧市街を取り巻くように流れるムタ・ムラ川の大氾濫によって、旧市街やデッカンなどの中心部、またほぼすべての橋が水没し、10万もの世帯が避難生活を余儀なくされた。また、正確な統計はないものの2000人あまりの死者が出たとされる。B さんは、大学グラウンドに作られた避難所で炊き出しなどのボラン

[6] 当時、警察官だったということは、イギリス植民地政府の役人だったということであり、独立運動家である息子を逮捕、拘留する立場にあったということ。

ティアとして働き、何日も泊まり込みをすることもあったという。年頃の女性が、ボランティアとしてさまざまな階層―なかにはスラムや低地の集落から避難してきた家族も多数含まれていると推測される―に対して奉仕するというのは、18～19歳という年齢を考えても、またバラモンという社会階層を考えても特異なことのように思われるが、B さんいわく、ガンディー主義者だった父親は社会奉仕を重要だと考えており、娘に対してもそれを推奨したのだという。

B さんにとって、学生時代を通したガール・スカウトのボランティアというのが、公的領域との接点を作り出してきた。その後もガール・スカウトには関わり続け、スカウト連盟の役員や理事を歴任し、プネー支部の代表を務めたこともある。また、スカウト連盟の仕事で、デリー、ハイデラバードなどインド各地を訪れたり、ハンセン病への啓蒙活動や巡礼者へのボランティアのような多様な活動を行っている。

70歳になる現在でも、自宅がある町内のコミュニティ運動場で、毎日夕方にスカウトを運営し、子どもたちにゲームやスポーツを教えている。また、60代までは、ソサエティの女性たちを誘ってバレーボールチームを作り練習をするなど、リーダーシップを発揮し続けてきた。就職をしたことはないが、スカウト活動が B さんにとっての社会活動であり続けてきたのであり、その基礎は学生時代に培われてきたといえるだろう。

5.　就労と公的領域

7 年生までの教育を受けた最年長80歳の 1 名を除き、調査対象者はほぼ全員が大学教育を受けている。それでは、そうした高等教育を受けたインド女性はどのようなライフコースをたどるのだろうか。まず、この世代の女性にとって大前提となるのが、結婚と出産である。それはどれほど教育を受けたインテリ層であっても同様である。したがって、彼女たちは大学卒業前後の21～23歳で見合い結婚し（1 名は恋愛結婚）、子どもを産んでいる。子ども数は 4 人を産んだ 1 名（80歳最年長女性）を除き、全員が 2 人である。

さて、10人のなかで就労経験があるのは 7 名、まったくないのは 3 名であるが、結婚前に 2 年ほど英語教師として働いた、などごく短期の就労を除き、退職するまで働いた経験を持つのは 5 名である。したがって、調査対象者のうち半数がいわゆる就労者であったといえる。仕事の内容は、教育（大学教員）2 名、公務員（国家、州政府）2 名、医師（アーユルヴェーダ）1 名である。結婚前に働いていた人の仕事は、小学校の英語教師と銀行員であった。

さて、彼女たちの就労経験とはいかなるものだったのだろうか。ここでは 2 名の語りを紹介する。

C さん（65歳）は、現在、息子夫婦とプネーに暮らしている。パンダルプールというプネー近郊の町で生まれ、教育のため 5 歳でプネーにやってきた。C さんは、3 歳の時に父親が死去したため、プネー近郊の K 宿営地（cantonment）内の学校で教師をする母親と母方祖母の 3 人の女家族で育った。母親は教師として働き家族 3 人の生活を支えたが、1 人娘だった C さんも，銀行へ行きお金を下ろす、ケロシンランプを運ぶ、公共料金の支払いをするといった、この階層の家族であれば通常は男性がやるようなさまざまな仕事も一人でこなしてきたという。1969年に BSc（サイエンス）の学位を取り、同年に中央政府の農業食料省の一機関で仕事を得て公務員となったが、70年に結婚し、

72年に長男が産まれると仕事を辞めてしまう。

中央政府の公務員の仕事なんて、みんながうらやましがるような仕事だったのに、若くてよく分かっていなかったのですね。10時から17時まで仕事があって、どこに子どもを預けるかという問題があったので、子どもが出来てすぐにやめてしまいました。でもすぐに何かしようと思い、母が教師だったので、教師だったらずっと続けられるかと思いました。それで、大学で教育学を専攻し直し、74年にはB.Ed（教育学）を修めました（2015年８月20日）。

Cさんはその後、数学教師として働きながら77年に長女を産み、さらに教育学修士も取得した。その後、Cさんははっきりとは語らないが、夫との関係に変化があり、長期にわたって別居をすることになる。その間Cさんは２人の子どもを連れてスタッフ寮のある学校や法人機関で教師やカウンセラーとして勤務してきた。キャリアを上昇させるには博士号が必要との助言を受け、教育学で博士号を取得し、教育大学で教職課程にいる学生のための教育を担ってきた。55歳で退職した現在でも、マハーラーシュトラ州教育審議会（The Maharashtra State Board of Secondary & Higher Secondary Education）用の数学の教科書を作成する委員会や、マハーラーシュトラ州教育調査訓練委員会（State Council of Education & Research Training）の委員を務めるなどの要職を兼任している。

母親が小学校の先生として働く姿をずっと見てきました。イギリス植民地下だったので、母の英語はとてもきれいでした。ナウワリ・サリー[7]を着て教壇に立っていましたよ。彼女もディプロマをしながら、大学の学位を取りました。私が大学生だったとき、母もB.Edの資格を得るため大学教育を受けていました。父親もおらず、母親も教師だったので、全ての教育は国家奨学金を得て可能となりました。キャリアのために私も学位を取って働いてきましたが、恩返しのつもりで、いまは家で近所のスラムに住む子どもたちの10年生試験のために、数学と英語を教えています（2015年８月20日）。

Cさんの経歴は、教育と就労が一体となったものである。卒業後に「運良く」国家公務員となるものの、出産を経て退職してしまう。これは、公務員職に就いた女性のキャリアパスとしてはむしろ珍しく、通常は家族や親族、あるいは家政婦などの助けを借りながら、仕事を続けるケースが多い。Cさん世代の女性にとって、公務員というのは、安定しているうえ、仕事はそれほど厳しくはなく、かつ退職後は充実した年金があり、バラモンの中間層の女性にも「ふさわしい」職だとみなされていた。子育てにおいて家族のサポートを得ることが難しく、それをやめてしまったことは、Cさんにとっては後悔したことの一つであるという。だが、その後、教師の仕事をしながら、高等教育を受け資格を取得し、最終的には教育大の教授へとキャリアを進められたのは、ひとえに彼女の努力もありながら、女手一つでDさんを育てあげた、教師だった母親の影響もきわめて大きかった。教師という、

[7] ９ヤード（約822センチメートル）の布を身体に巻き付ける、マハーラーシュトラ州の伝統的な衣装。

公務員とならぶ、もうひとつのバラモン女性に「ふさわしい」職が、母から娘へと受け継がれたといえるのである。

次に紹介するDさん（66歳）は、退職した州政府公務員である。彼女はプネーで生まれ育ったが、大学はプネーから電車で4時間ほど離れたソラプールにあるエンジニアリング・カレッジに進学し、1971年に卒業するまで4年間寮生活を送った。父親は教育大学の教授、母は専業主婦だったが、父親の退職後、両親は自宅で塾（英語と数学）を開き、学生に教えていたという経歴を持つ。

大学を卒業してからプネーに戻り、主に公務員の仕事を探して就職活動をしました。母方オジが州政府で土木建設（civil engineering）関係の仕事をしていました。オジに推薦してもらって、建設局の土木建設課を受けました。退職するまで、36年間働きましたよ。当初、職場には女性は私一人だけだったので、現場ではなく内勤が多かったのです。でも、エンジニアとして建設現場で働きたかった。念願がかなって、45歳のとき現場にトランスファーされました。現場の総監督として、さまざまな部署を管理し、結果として事業は成功をおさめました。わたしの仕事人生の中で、最も充実した経験です。

転勤は少ないほうだと思います。36年間で、ソラプールとムンバイに行った2度だけです。ムンバイには、プネーから毎日電車で通っていました（2016年2月26日）。

Dさんは、退職時は局長として、公務員としても高い地位についていた。Dさんの語りからは、女性が少ない公共事業を取り仕切る土木建設の世界で、業務に向き合ってきた自負を窺うことができる。プネーの役所での内勤が主だったとはいえ、36年におよぶキャリアのなかで、子育てなどはどうしてきたのだろうか。

Dさんは74年に同僚だった人と結婚し、7歳違いで娘を2人産んでいる。長女が生まれたとき、母親はまだ42歳で、家の近くに住んでいた。そのため、長女が5歳になるまで、毎日母親が自宅とDさんの家を行ったり来たりして、育ててくれたのだという。一方、7年後に生まれた次女のときは、夫の両親がすでに退職していたため、プネーに3か月住んでムンバイに帰り、またプネーに来るなど、行ったり来たりして子育てに協力してくれた。

次女は義母が育ててくれました。義母はムンバイで小学校の先生をしていましたが、そのころには退職してプネーに来てくれました。母と義母が近くに住み、両方の助けを借りていました。夫は、公務員の仕事をやめ、民間企業に転職して忙しく過ごしていました。3年間、南アフリカで仕事をしていたこともあります。だから、両方の実家からの援助が助けになりました。

Dさんの語りからは、仕事が忙しく、海外勤務もあった夫に代わり、夫婦の両親が子育て期にはきわめて重要なケアの担い手となっていたことが分かる。夫は病気で13年前に亡くなり、娘二人も結婚しプネーを離れた今では、90歳近い実父と2人暮らしをし、Dさんがケアの担い手として家族を支えている。

ここまで見てきたように、学校や就労という女性の公的領域を支えるものは、家族、親族内のネットワークを利用できるかどうか、またケアの担い手として家族に余剰メンバーが存在しているかどうか、に大きく関わっているのである。

6.　女性の公的領域を支える家族

そこで、ここではＥさん（60歳）一族の事例をもとに、家族の女性成員の就労と、ケアを担う家族メンバーについてみてみたい。Ｆ家は、1920年代にコーカン地方からマハーラーシュトラ州南部のハリプールへ、さらに40年代にハリプールから10キロほどの都市サングリへと移動してきた。ここで基点とする夫婦は２女５男の７人の子どもを産み、プネーに婚出した２人の娘を除いて、息子５人はサングリで教育を受け、暮らしてきた。本家（*mukkya ghar*）と呼ばれる長男家族の家に未婚時代から兄弟がともに暮らす男児残留型の拡大家族を形成してきたが、兄弟は結婚と子どもの出産などのタイミングで、それぞれ独立し、世帯分化している。だが、子世代が全員プネーに移住した現在でも、ガネーシャ祭りやディワーリなどの祭礼や家族の伝統行事であるグル・チャリットラ・パラヤン儀礼などは、子世代の家に参集して遂行されており、父系の親族関係が維持されているケースである。

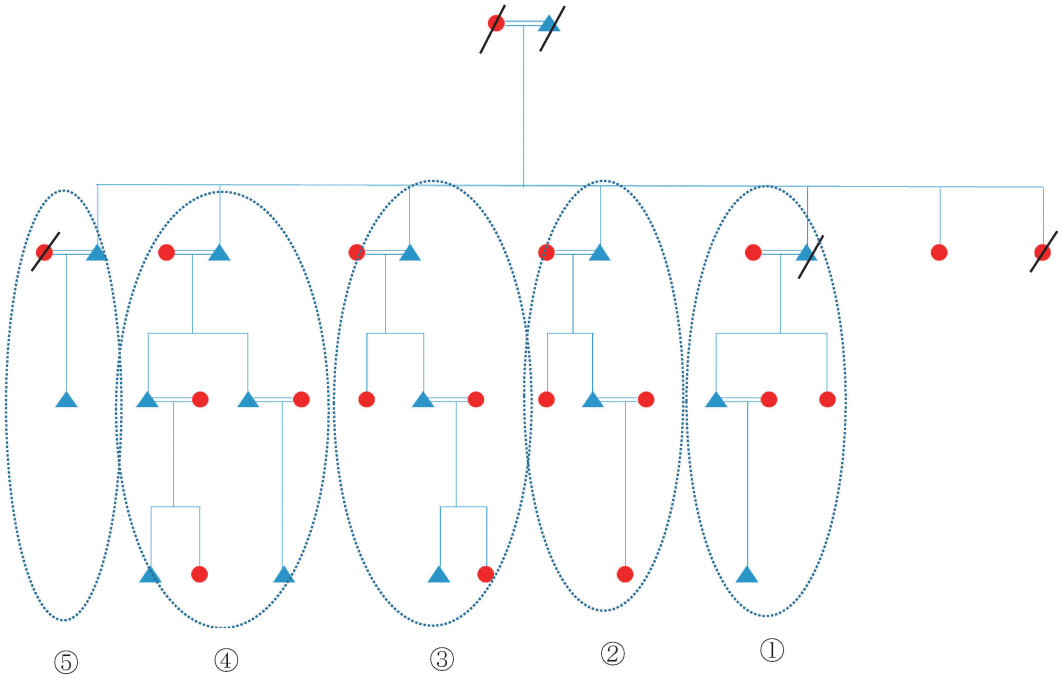

図１　Ｆ家の親族図

Ｆ家の概要（①～⑤は、長男から五男までの各世帯を表す）

①　長男家族：夫（80）、妻（76）。夫は父から引き継いだ家のビジネス（薬の卸業）、妻は小学校教師。サングリの本宅に住み続けてきたが、現在は息子家族とプネーで同居。2019年１月に夫が臓器不全により死去。息子はITエンジニアで、シンガポール、アメリカ、イギリス、ドイツに赴任して

いたが、10年前インドに帰国しプネーに居を構え、親を呼び寄せた。娘は大学教授（サンスクリット学専攻）。娘の夫が２年前に死去したため、徒歩10分の場所に暮らす家族と日常的に行き来をしている。

② 次男家族：夫（78）、妻（70）。二人とも退職した政府系銀行の銀行員。長男誕生後に世帯分化、近隣に住んできたが25年前、三男の家の前の土地に自宅を建設した。夫が気管支喘息で介護が必要。息子、娘家族はプネーに移住。二人の年金や投資（複数のアパートを所持）により金銭的な余裕があり、ヘルパーを雇いサングリで二人で生活をしており、プネーに住むつもりはない。息子夫婦に第二子が誕生したため、2018年は一年近く夫婦でプネーに滞在していたが、2019年１月にはサングリへ戻った。

③ 三男家族：夫（75）、妻（66）。夫は大学教授、妻は税理士事務所（パート）。長男誕生後、本宅の隣に世帯分化、出産後の１年は本宅や四男宅で過ごす。30年前に郊外に家を買う。プネーに移住した息子と息子の妻ともに公認会計士。サングリ、プネーを行き来してきたが、娘孫の教育のため妻だけナーシックへ（トライブコミュニティの知的財産権を保護するNGOを組織する娘夫婦は山岳地帯に居住し、娘は週末のみナーシックへ来る）。2018年、妻は実母（90歳）の病気介護のためコーカンとナーシックを行ったり来たりする生活をしている。

④ 四男家族：夫（73）、妻（65）。夫は銀行員、妻は専業主婦。長男誕生後、本宅から歩いて５分のところに世帯分化。大学卒業後、長男、次男ともにプネーへ。次男夫婦の双子の世話をするため、2015年にプネーへ移住し、次男家族と同居。家の維持のため妻はサングリ、夫はプネーと別れて暮らす。孫が３歳を過ぎたらサングリへ戻りたいと希望しているが、どうなるかは分からない。

⑤ 五男家族：夫（70）、妻（63）。夫は会社員、妻は病院事務。息子は大学からプネーへ移住（独身）。夫婦はサングリに住み続けている。2018年12月、妻が肝硬変を悪化させ死去。

F家の概要から分かるのは、①長男の妻や②次男の妻のようにフルタイムで働く女性成員に対して、④四男の妻であるEさんのような専業主婦がいるということであり、世帯分化する前は、実質的にEさんが料理などの家事を担うことが多かった。また、高齢世代にあたる祖父母は、家にいるということによって、まだ小さな子どもたちの見守りや世話などのケアを担っていた。退職した現在、長男妻や次男妻は自分の年金ももらうことができ、高齢期において子世代に依存しない経済的な自立性をある程度確保することができている。だが、それは家族の中にバッファー要因としてのEさんや祖父母のようなケアの担い手がいたからこそ可能だったのである。

7. おわりに

本稿では、西インド、マハーラーシュトラ州に居住するチットパーヴァン・バラモンの高齢女性の語りから、彼女たちの青年期から壮年期に至る教育や就労の経験についてたどってきた。それによって、ポストコロニアル期における都市中間層の女性が経験する公的領域の実相を示そうとしたものである。

まず、教育という公的領域に関しては、そこへの参入において、そもそもの教育機会の獲得という

点からも、女性教育のロールモデルの存在という点からも、調査対象者の女性たちにとって、家族の役割とネットワークが大きかった。コロニアルから独立期にかけての社会改革運動の影響下にあった両親のもと、女子教育を受けることが自明のこととして育てられた彼女たちは、教師の親を持つものも多く、その場合は例外なく、奨学金を得て高等教育まで受けることができている。両親のいずれかが公務員職についている人も多く、収入としては高くはないものの、安定した世帯収入があり、娘に教育を受けさせる余裕があったということにもつながっている。

また、就労し退職まで働いた経験を持つ5人の語りからは、仕事と家庭生活を両立するために、ケアの担い手としての家族の存在が不可欠であったことが明らかである。その多くが教職や公務員である彼女たちは、社会的にも尊敬される、バラモン女性に「ふさわしい」職についている。今日のインドでは、収入の高い花形の職業はIT業界のエンジニアであるが、彼女たちの時代には、女性が働き続ける場として、学校や役所というのが主な公的領域であった。それはきわめて限定的な場でありながらも、市井の女性が主体性を持ちつつ社会参画をする領域として確かに機能していたのである。

参考文献

Bagchi, Subrata　2014　''Exploring Gender and the Public Sphere in India'', Subrata Bagchi (ed.) *Beyond the Private World: Indian Women in the Public Sphere*, pp.3–46, Delhi: Primus Books.

Chatterjee, Partha　1993　*The Nation and Its Fragments Colonial and Postcolonial Histories*, Princeton: Princeton University Press.

喜多村百合・菅野美佐子　2015　「女性が政治に参加するとき―ケーララ州とウッタル・プラデーシュ州を中心に―」、粟屋利江・井坂理穂・井上貴子編『現代インド5―周縁からの声』東京大学出版、155–176頁。

常田夕美子　2011　『ポストコロニアルを生きる―現代インド女性の行為主体性』、世界思想社。